

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2015年 6月 75号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com



プノンペン制圧、大虐殺はじまる

あれから 40 年

「歴史」は終わっていない

黒シャツのクメール・ルージュ兵士によって首都プノンペンが制圧され、カンボジア戦争が劇的な結末を迎えたのが 1975 年 4 月 17 日でした（写真：カンボジア資料センターのポスターから）。2週間後の 30 日にベトナムでも同じようにサイゴン（現ホーチミン）が陥落して第 2 次世界大戦終結と同時に始まった長いインドシナ戦争が終りました。米国の敗北という戦後史にひとつの区切りをつけた出来事でした。それから 40 年が過ぎ去りました。

真相究明と正義実現

ベトナム戦争の「裏戦争」と言われた不条理な戦争に引きずり込まれたカンボジア人にとっては、この戦争終結は勝利者ポル・ポト政権による恐怖政治の始まりでした。同政権のもと全土が強制収容所と化し、ベトナムの軍事介入で同政権が崩壊するまでの 3 年 8 カ月の間に国民の 3 人か 4 人に 1 人、約 200 万人が疲労困憊、飢餓、病気、処刑などによって命を失いました。ヒトラーのナチスが 400 万人のユダヤ人を集団虐殺したホロコーストにも並ぶ大虐殺です。

あれから 40 年のカンボジアにとっての重い課題

は悲惨な民族体験を若い世代にどう引き継ぐかです。大虐殺の資料収集に当たっているカンボジア文献センター（CDC）が中心になって、全国各地の学校や地域で辛くも虐殺をなむがれ生き延びた人たちが体験を語る勉強会が開かれています。

そこでのテーマは真相究明と正義の実現の 2 つです。ポル・ポト派は通貨も学校教育も、西欧文明の一切を否定したので、大虐殺にかかわる記録はほとんど残されていません。

CDC は生存者からの聞き取り、強制労働や虐殺の痕跡などあらゆる資料の発掘を今も休むことなく続けています。最高指導者ポル・ポトは既に死亡していますが、残る 5 人が国際法廷で裁きを受けています。この裁判を通して彼らがなぜ、あのような大罪を犯したかを明らかにし、その罪を償わせることです。

現実には被告たちは高齢化し痴呆症状が進んで真相究明にも償いにも応えられない状況です。フン・セン首相ら現政権幹部はポル・ポト派にルーツがあり、中国や米国も長年、ポル・ポト派を支持したこともあって、国際法廷を続けることに消極的です。でも CDC は「正義の実現」を諦めてはいません。

米ワシントンにあるホロコースト博物館がカンボジア大虐殺の始まりから 40 周年にあたって特別展示会を開いています（左の写真）。展示は 2017 年 10 月まで 2 年半の長期にわたって続けることにしています。同博物館はホロコーストに続いて同じようなカンボジア大虐殺が起こったことに衝撃を受けていて、このような大虐殺（以下、次頁へ）



米国でも特別展示会

米ワシントンにあるホロコースト博物館がカンボジア大虐殺の始まりから 40 周年にあたって特別展示会を開いています（左の写真）。

展示は 2017 年 10 月まで 2 年半の長期にわたって続ける

ことにしています。同博物館はホロコーストに続いて同じようなカンボジア大虐殺が起こったことに衝撃を受けていて、このような大虐殺（以下、次頁へ）

(1 頁からの続き) を繰り返さないよう米国民や国際社会に広く訴えるために、CDC と協力して展示会を企画しました。

米務省も後押ししています。アジア太平洋担当副次官補が開会のあいさつをして、犠牲者のためにポル・ポト政権幹部を裁き、虐殺の実相と正義を追求する国際法廷に米国が巨額の財政支援をしていると強調しました(拠出額は日本が最大)。カンボジア現地でも米大使が、語るのも恐ろしいことだが過去の過ちが引き起こした犯罪を忘れてはいけない、特に若い世代に学んでもらいたいというメッセージを発表しました。

大国に振り回されたカンボジア

ポル・ポトの「製造責任」は

米国がカンボジアに寄り添う姿勢をとっているのはいいのですが、カンボジアの悲劇を引き起こしたのはポル・ポトの「過ち」だけではありません。米国の大きな責任に触れないわけにはいきません。

インドシナ 3 国と呼ばれるカンボジア、ベトナム、ラオスは 19 世紀にフランスの植民地にされました。第 2 次世界大戦でフランスがナチス・ドイツに占領されたのに乗じて日本が「進駐」しました。日本の降伏でそれぞれが独立を目指します。

ラオスは独立したものの王党派、左派、中立派の内戦になりました。ベトナムではホーチミンが率いる左派勢力とフランスの戦争になりました。フランスが敗退して終りかけたのですが、米国がリリーフ役を買って出ました。カンボジアだけはシアヌーク国王がフランスを相手に粘り強い交渉を続けて、1953 年に無血で独立を達成しました。

ベトナムでは最新式の兵器で重武装した米軍がゲリラ戦争の泥沼にはまりこんでいきます。ゲリラはいくら追いかけても、ジャングルに消えてしまいます。特にベトナムとカンボジアの国境地帯は深いジャングルに覆われていて、ゲリラにとっては「聖域」になっていると米国はみて、ベトナムのゲリラをカンボジア領から追い出すよう迫りました。

カンボジアは隣国の戦争の火の粉をかぶらないよう、中立政策をとっていました。そんな軍事力もありません。米軍はいずれ戦争が終われば帰って行きますが、

ずっと付き合わなければいけない隣国とことを構えたくはありません。シアヌークさんは米国の要求を逃がたりかわしたり、懸命の「綱渡り外交」を演じました。

1968 年の米大統領選挙で「ベトナム戦争を終わらせる」という公約を掲げたニクソン大統領が登場しました。ニクソン大統領とキッシンジャー補佐官はゲリラの「聖域」とされるカンボジア領のジャングルに国際法違反の秘密爆撃を始めました。それもさした効果が上がリません。1970 年 3 月シアヌーク国王が中国、ソ連訪問に出た留守をねらって親米右派のロン・ノル将軍がクーデターをおこして国王を追放し、軍・政の実権を握りました。新政権は米軍とともに「聖域」掃討作戦を強行しました。米軍が仕組んだクーデターだったことは明白でした。

カンボジアのクメール・ルージュと呼ばれた反政府左翼ゲリラは国民の人気の高いシアヌーク国王を担ぎ、連合して反軍事政権・反米の闘争に立ち上がると宣言したのです。これでクメール・ルージュは一気に勢力を拡大して行きます。ポル・ポトは其中で最高権力を握り、全土を制圧しました。



大国の代理戦争

クメール・ルージュの共産主義イデオロギーは、ソ連派とされた隣国ベトナムのホーチミン主義より農村革命をめざした毛沢東主義に傾倒していました。カンボジアはアンコール王朝時代にはインドシナ半島最大の帝国でしたが、隣国のベ

トナムおよびタイに圧迫されて現在の小国に閉じ込められました。この歴史も背景にあると思います。

ベトナムはポル・ポト派と対立し離脱した親ベトナム勢力を担いで、1978 年末からポル・ポト政権に総攻撃をかけ、タイ国境地帯のジャングルに追い込みました。冷戦は中ソ対立によって新たな局面に入っていました。ソ連派の共産主義ベトナムが南北を統一し、カンボジアも勢力下に収めることは米国も中国も受け入れませんでした。

中国と米国の支援するポル・ポト派。対するはソ連、ベトナムが支援する親ベトナムのヘン・サムリン政権。大国の代理戦争としての内戦が瀕死状態のカンボジア国民をさらに痛めつけたのです。冷戦終結で代理戦争の構造が緩み、1993 年国連監視下の総選挙が実現、やっと国家再建への道が開けました(写真はカンボジア・コンポンスプー州のジャングル)。

教育再建、ゼロからの出発

「植民地文化」の根絶図る ポル・ポト政権が徹底破壊

池内 秀樹

KEAF がそのほんの一部を支援しているカンボジアの教育制度がどのようなものなのかここで現場での感想を交えながら、ちょっと振り返ってみたいと思います。

先生は粛清の対象、

会員のみなさまはすでに知っていることですが、カンボジアでは、かつてクメール・ルージュという反シアヌーク反米のゲリラ勢力がインドシナ戦争の過程で中国の支援をバックに勢力を拡大し、1975年4月、首都プノンペンを制圧。ポル・ポトラの指導者は、首都に入った途端、首都市民の地方への、例外を認めない「一斉退去」を指令しました。それだけでも

世界中が驚いた成り行きでしたが、その後、教育制度廃止、宗教の禁止と仏教寺院などの破壊、通貨リエルの廃止、知識人階級の撲滅など、これまで国家を形成するのに必要だった制度や体制を廃止・一掃し、原始的

とも思えるカンボジア式共産主義社会の実現がポル・ポト政権の方針だったこと、首都からの市民下放はそれをまず最初に実行に移したものだことが、ほどなく分かってきました。現在シリア、イラクを席卷しているイスラム教過激派組織のISとその行動の極端さは同じといえるでしょう。

ポル・ポト政権の秘密主義で、カンボジアでなにが起きているのかしばらくは分かりませんでした。1979年1月、ベトナムが支援するヘン・サムリン軍が首都を奪回し、この政権が3年半強で崩壊したさい、プノンペンだけでなく、地方の主要都市、田舎には、学校が文字通り建物を含めて一校も残っていないことが判明しました。学校の先生たちも知識人として粛清されて一握りの人々だけがかるうじて生き残っていたという惨状でした。教育だけではなく、政府を構成すべき官僚に適した人材も生き残っていなくて、ヘン・サムリン軍はプノンペン奪回の作戦の途上、解放された人々のなかから資格のありそうな人々を救い上げて、例えば「君はとりあえず首相府付、君は外国語ができるようだから外務省に、君は教育省に」（実はヘン・サムリン指導部には具体的な政府組織のイメージはなかったのですが...）というような具合で、行き当たりばったりですが、とにかく人材を確保しなければ、というような状況でした。



写真はタッコー高校に教科書や支援品を届けたときのものです。右側はチェア・ソティ校長先生。1993年に同中学（当時）が再開されたとき先生は大虐殺を免れた2人だけで、ソティ先生はその1人だったそうです。

ヘン・サムリン軍の首都解放後、タイ國境に逃れたれたポル・ポト政権との間で内戦が続きましたが、国連の仲介もあって停戦。フン・セン政権（ヘン・サムリン政権の後継）がようやくカンボジアの復興のために安定的な政権として定着しました（その後の政権の数々の腐敗の事例はここでは取り上げません）。

まだまだ低い就学率

文字通りゼロからスタートとなった教育制度の復興は、当初は各国からの援助に依存しなければなりません。日本の民間組織も学校建設に取り組み、

KEAF が支援するプレイベン州の高校、中学校のいくつかはこうして建てられたものです。

KEAF の前身、CEAF もこれらの建設にかかわっています。先生が足りない、教室が足りない、教科書・教材が

足りないという状況はここ数年、かなり改善されましたが、まだ午前・午後の二部制授業を続けている学校も多く残っています。KEAF が支援しているある高校では、数学が他校に比べて弱いというので、いろいろ事情を聞くと、一時期数学の先生がいなかったということがその原因だったというようなこともごく最近までありました。

カンボジアは6・3・3・4制で日本とほぼ同じ。小学校(6~11歳)、中学校(12~14歳)の9年間の義務教育を受けることが憲法で規定され、建前として学費は無料です。

学期は10月~4月上旬が1学期、4月下旬~7月が2学期。就学率は決して高くありません。4年前の2011年は、小学校69%、中学校17%(日本の外務省調べ)という数字があります。実感としては、プレイベン州では、もっと状況はいいのではないかという印象はありますが、まだまだ低いことは否めない。子供のうちから就労していたり、せっかく高校に通

っているのに、男子生徒は建設現場へ、女子生徒は縫製工場へと退学して働きに出てしまったりというケースをこれまでもしばしば報告してきました。



携帯電話、バイクを持っている生徒がいる一方で、自転車で1時間もかけて通って来る生徒もいるし、掘っ立て小屋のような下宿を数人で間借りしている生徒もいる。高校中退の建設現場や縫製工場の労働者より、先生の給与ははるかに低いな

ど、なにかちぐはぐで、大きな矛盾と拡大しつつある格差を抱えたままの教育現場です。

5ドルの奨学金でも

KEAF が支給する月額5ドルの高校生の奨学金がこのなかでどこまで支援に役立っている

のか、どういう意味を持つのか、現場にいると、一層、考え込まれる問題ですが、奨学生たちとの面接で思うのは、われわれの支援で放課後の有料の補習授業が受けられたり、制服を購入することができたりして



いる実情が奨学生たちから紹介され、顔を輝かせながら将来の希望を語る生徒たちを見ていると、額はわずかでも、十分役にたっている、という手ごたえを感じます。細々ながら、われわれの支援はまだまだ必要なのです。

上の写真は、ミシンで自分たちのブラウスなどを縫っているタッコー高校の女生徒、下の写真はソンポン小学校の低学年の生徒たちです。

ありがとうございました

(2015年3月4日～5月31日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます(敬称略させていただきます)

	(宮崎)		(東京)		(神奈川)		(神奈川)		(東京)	
(東京)		(神奈川)		(東京)		(大阪)		(東京)		(東京)
(福島)		(東京)		(東京)		(神奈川)		(東京)		(京都)
	(東京)		(東京)		(東京)		(東京)		(東京)	
(東京)		(銀行振込)		(東京)		(東京)		(東京)		(福島)
(大阪)		(東京)		(熊本)		(東京)		(神奈川)		(静岡)
	(東京)		(大阪)		(千葉)		(神奈川)		(東京)	(東京)
	(神奈川)		(東京)		(福岡)		(大阪)		(神奈川)	(東京)
	(神奈川)		(富山)		(埼玉)					

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。

《カンボジア・ベトナム8日間の旅》に参加しませんか

歴史と文化、民族の悲劇と希望に触れ

豊かな自然と美味しい料理を楽しむ

皆さんが支援している農村の

貧しいけど元気に学んでいる子どもたちを訪ねる

(日程) 2016年2月～3月はじめ。
訪問先はプノンペン、シエムレ
アプ(アンコールワット)、ホーチ
ミン、ハノイなど。

7泊(機中1泊) 8日間です。

時期は猛暑の雨期(4月～9月)
は避け、乾季(10～3月)の2月
後半～3月はじめ。

参加状況、現地事情、航空便の
事情などを勘案して、シニア向け
の旅行計画をつくります。



(旅費) 250,000円(概算)。さら
なる円安が心配ですが、ひところ
高額になっていた航空運賃に加算
される燃料費は下落傾向にありま
す。

(申し込み先) 7月15日まで

(第1次募集)

・カンボジア教育委支援基金

info@keaf-japan.com

・金子敦郎

電話 03-3418-7003

Email att-akaneko@gol.com

◇カンボジアは懸命に国家再建の道を進んで
います。経済は周辺国の投資を呼び込んで、高度
成長中です。私たち KEAF は皆さんのご支援を
うけてこの8年、カンボジアの底辺からその歩み
を見てきました。

◇でこぼこ道が舗装された、電気が点いた、新
しい校舎ができた、裸や裸足の幼児が減った、高
校生から中学生にまで携帯電話を持つ子どもが
出てきた・・・あの貧しかった村がこの3、4年
急速に変ってきました。でも、喜んでばかりはい
られません。格差もすごく広がっています。

◇プノンペンと隣国ベトナム最大の都市ホー
チミンを結ぶ国道1号線にこの4月、大河メコン
をひと跨ぎする翼橋が開通しました。KEAF が支
援する農村地域へのアクセスが飛躍的によくな
り、「カンボジア・ベトナムへの旅」にお誘いす
ることができるようになりました。

◇カンボジアとベトナムは日本人の海外旅行
先としては、フィーリングが一番ぴったりする国
だと思います。アンコールワットは何回訪れても
退屈はしません。ご家族や友人にも声をかけてい
ただき、多数のご参加を頂ければ嬉しいです。

※写真つき奨学生紹介の5、6、7頁は
個人情報保護のため省略